[redacted]

[redacted]

C. ボルド・J. モランジュ編

『経済学者および行政官としてのチュルゴ』

Christian Bordes et Jean Morange, éd., *Turgot, Économiste et Administrateur*, Paris, Presse Universitaire de France, 1982, xxxi+268 pp.

すでに旧聞に属するが，1981年10月8, 9, 10日チュルゴの没後200年を記念して，フランスのリモージュ大学法経学部で討論セミナーが開かれた。リモージュはチュルゴが1761年から74年まで13年間，地方長官として過した土地である。1961年には彼の着任200年を記念して，市を挙げての盛大な催しがあった[1]ほど，そのゆかりは深い。本書は，その記念集会での報告をまとめたものである。いきおい報告者の半数近くがリモージュ大学のスタッフで占められている。

本書は編者の論点整理をふくめて23の報告から成り立っており，第1部「経済学者チュルゴ」(報告10篇)と第2部「行政官チュルゴ」(12篇)という構成で，チュルゴの経済学を理論と実践の，または政治と経済の両面にわたって多面的に解明しようとした労作である。まず報告の題名を記して，あらかじめ読者におよその構成を理解していただいた上で，紙数の許す限り，若干の論評を加えたいと思う。

I　「経済学者チュルゴ」

——(1)歴史と経済(R. Finzi, Turgot, l'histoire et l'économie : 《Nécessité》 de l'économie politique ? 《Historicité》 des lois économiques ?), (2)商業と工業(J.-F. Nys, Le commerce et l'industrie chez Turgot : Mercantilisme ou physiocratie ?), (3)チュルゴとスミス(T. W. Hutchison, Turgot and Smith), (4)資本理論における「即時」の概念(T. Vissol, La notion de 《sur-le-champ》 dans la théorie du capital de Turgot), (5)チュルゴと多人口主義(P. Surault, Turgot et le populationnisme), (6)資本の概念(J. Gallais-Hamonno, Le premier exemple d'un concept économique en extension et en compréhension : Le concept de capital travaillé par Turgot), (7)純生産物の概念(J. Ravix, Le concept de produit net dans les analyses économiques de Turgot), (8)賃金論(P. J. Lancry, La conception du salaire chez Turgot), (9)競争理論の起源(P. M. Romani, Turgot et les origines de la théorie de la concurrence), (10)土地と資本-貨幣の矛盾(J. Cartelier, La contradiction terre/capital-argent chez Turgot).

II　「行政官チュルゴ」

——(1)国家と法(J. Morange, L'état et le droit dans la pensée de Turgot), (2)立法者チュルゴ(E. Agostini, Turgot législateur (août 1774–mai 1776), (3)チュルゴとフランスの行政的伝統(J. Phytilis, Turgot et la tradition administrative française), (4)刑事訴訟の改革(P. Braun, Turgot et la réforme de la procédure pénale), (5)財政思想(J. Cathelineau, Les idées fiscales de Turgot), (6)チュルゴとネッケルの社会政策(H. Grange, La politique sociale de Turgot et de Necker), (7)コンドルセによる聖者伝としてのチュルゴ伝(B. Ebenstein, Turgot vu par Condorcet, éléments d'une hagiographie), (8)地方長官および史家としてのチュルゴ(P. Texier, Turgot intendant et historiographe), (9)1770年の危機に耐える自由主義(J. C. Peyronnet, Le libéralisme à l'épreuve de la crise de 1770), (10)体系の精神と事実の体系化：チュルゴとリモージュ体験(M. C. Kiener, Esprit de système et systématisation des faits : Turgot et son expérience limousine), (11)農業政策(B. Cubertafond, La politique agricole de Turgot), (12)都市計画(J. L. Harouel, L'urbanisme des intendants au siècle des lumières : Pour une juste appréciation de l'œuvre urbanistique de Turgot).

チュルゴといえば必ず問題となるのがスミスとの関係である。これはもちろん重要な問題だが，デュポン・ドゥ・ヌムールがスミスのすぐれた理論はすべてチュルゴに由来すると発言して以来，両者の関係を単なる経済学における先駆争いに矮小化する傾向が続いた。その傾向は残念ながら本書にも尾をひいている。ガレ=アモノ(I-6)は，スミスはチュルゴから利潤や資本形成の分析を借用したのに，チュルゴからの書簡を自分で焼却して，その影響関係を不明にしたために，経済学はその後アングロ・サクソンの学問となったのだと嘆いている。こういう議論は極端な例であってほしいのだが，そのアングロ・サクソンから唯一人参加したハチスン(I-3)もまた，チュルゴの『価値と貨幣』は中世からジェヴォンズに至る価値論史上の輝かしい重要資料であるが，これに対して師ハチスンの主観価値説を捨てたスミスの価値論は彼自身の経済哲学とも両立しない「不幸な異変」となっていると断定している。両者を単純に対立的に扱って，安易に優劣を論ずる，これもまた古くて，陳腐な議論の一例である。だがこれら2篇は本書ではむしろ例外に属するといってよい。

フィンツィ(I-1)もチュルゴとスミスの対比を論じている。彼は周知のミークの説(スミスの発展4段階説)に従って，チュルゴをいったんスミスに即して理解しようとするのだが，彼はミークほど断定的ではない。むしろスミスの発展の第4段階としての商業社会について，なぜチュルゴがそれに言及しないかを問うている。彼によれば，純生産物の発生する農業社会の分析こそ，チュルゴにとっては本質的であったのである。問題提起の興味深さに比して，結論は平凡である。しかし彼がチュルゴは経済法則を歴史的とみる見方と自然的とみる見方との間で揺れているとして，チュルゴの矛盾そのものに内在したところに，この論文を特徴あるものとした一点があるのである。フィンツィは，テクストを曲げて，チュルゴのなかにありもしない一貫性を築くのは危険だという。だが彼自身はこの危険にまだ十分気づいていない。彼はもともと存在しないテクスト，つまりデュポンの捏造した『普遍史』をテクストとして用いている[2]。彼が多用する『政治地理学』のテクストさえ，私は強く疑問としているのである。

本書では若干の未発表書簡以外，新資料は発表されていないが，シェル版全集の不完全さはすでに気づかれているようである。編者は新版全集の必要を訴えている。フィンツィの例でもわかるように，矛盾そのものに内在

するためにも資料の厳密な吟味と新資料の発掘が不可欠なのである。しかし新しい資料の提供はないにせよ，本書の諸論文の特徴のひとつは既存のテクストを精密に読み，これまで安易に築かれた固定観念を破り，矛盾そのもののなかに多面的な意味をみいだして，非体系的ではあるが新たな動的なチュルゴの全体像をつかもうとしていることである。

ヴィソル(I-4)はチュルゴを単純にスミスの先駆とすることに反対である。スミスは収入の節約分が直ちに資本に転形されるといい，シュンペーターはこの即時的均衡をチュルゴに由来するとしたが，ヴィソルはこのような一般化に反対して，チュルゴにあっては資本化の過程は必ずしも即時的ではなく，そこにありうる時間差が不均衡を招き，それが経済の収縮のプロセスをもひきおこしうると理解されていると指摘する。チュルゴの資本の理論は変動のある，はるかに幅広い成長の理論の不可欠の部分をなしているというのである。

ランクリ(I-8)もまたチュルゴにあらゆる問題の先駆をみようとすることの危険をいい，チュルゴの賃金論は決して一枚岩ではなく，賃金鉄則と労働の適正価格と賃金基金説の3つの要素を併せ持つ多面的な性格のものであることを指摘して，その折衷主義を積極的に評価しようとする。この折衷的性格はチュルゴの人口論にもみられる。チュルゴはあまり人口については発言していないが，シュロー(I-5)はさまざまな書きものからチュルゴの人口論をとりだしている。それによれば，チュルゴは決して重商主義的な多人口主義者ではなかったが，国力は人口に依存すると考え，同時に賃金をひき下げることでのみ人口増大の利益を認め，貧民への援助と死亡率との闘いのためにかすかに国家の「干渉」を求める「啓蒙的多人口主義」者であるという。ニス(I-2)もまた自由放任のチャンピオンと目されるチュルゴのなかに体系的ではないが，かすかな「干渉主義」が存在することを述べている。農業フランスから工業フランスへの転換期に立って，チュルゴは国家による機械購入，綿布業者に対する一時的特権の認可，国営運送会社や国立火薬工場の設立，サン・ゴバンのガラス工場への援助等，産業の指導と育成に努めた。ケネーよりむしろグルネに傾斜していたチュルゴのなかに重商主義と自由主義と重農主義とが混在することはすこしも驚くに当らない，とニスは指摘している。

チュルゴに対するさまざまな評価は，たしかにロマーニ(I-9)がいうように，彼の著作が断片的あるいは粗描的であることにもよるが，それよりも彼の思想の過渡的な性格がいきおい著作を断片的・粗描的なものとしたとみるべきであろう。モランジュ(II-1)のように，行政上の多忙さが理論的一貫性を保つのを妨げたとするのは，——そういう事情がないとはいえないが——いささか安易な評価に陥るといえないだろうか。チュルゴの経済思想の過渡的な面は主著『富の形成と分配にかんする諸考察』の理論構造上の不整合に端的に現われている。ロマーニ，ラヴィクス(I-7)，カルトゥリエ(I-10)の関心はこの点に集中する。ロマーニはチュルゴの価格と競争の理論の考察をとおして，この理論の限界が純生産物，資本，利潤の概念のあいまいさや地主階級の不可避的衰退と資本主義的発展における企業者階級の役割についての分裂を伴う洞察と両立していることを指摘し，ラヴィクスもやはり純生産物の概念の分析をとおして，チュルゴの描く社会の歴史的発展においては，土地はすべての富の源泉ではあるが，この社会の再生産の上では限界的役割を果すにすぎず，根本的役割は生産資本とそれを活用する資本主義的企業者階級に属することを明らかにして，チュルゴの純生産物の概念は重農主義のそれと同一ではないと結論している。カルトゥリエは，偉大な精神の一貫性の欠如はより表面的な精神の一見そうみえる一貫性より時として意味深いものであるとして，『諸考察』の構成における論理的分裂そのものを分析の対象としている。彼によれば，『諸考察』の第1-28節は交換関係とは無関係に描かれた「土地の社会」であり，第29-100節は貨幣が存在し，交換と価格形成を通じて，土地とは直接的には無関係に蓄積が一般化され，富が永続化される「資本の社会」である。チュルゴは土地とは無関係に富裕でありうるという事実と地主階級のみが収入をうけとる唯一の階級であるという命題の矛盾を地主と企業者間の「貨幣的交換」によって解決しようとしたのだが，土地と資本という異質の資格を同時に両立させようとしたところに，チュルゴの分析上の失敗の不可避性があったのである。

これまでチュルゴの思想家としての全体像が正確に持ちにくかったのは，研究がチュルゴの経済理論面に——それもすでに指摘されたように断片的な著作をとおして——かたよっていたためであったが，キーナーとペロネによるリモージュ地方長官としてのチュルゴの行政面における研究[3]が発表されて以来，この面での研究は大いに幅を拡げたように思える。第2部では「行政官チュルゴ」の多面性のみならず，その観念性と限界までが積極的にとりあげられている。冒頭でも述べたように，この記念集会に地元リモージュ大学のスタッフが多数参加し

たことが，この成功をもたらし，この記念出版をこれまでにない特徴あるものにしているのである。

ブロン(II-4)はチュルゴの刑事訴訟改革をとりあげ，彼がイギリス式に弁護権を重視し，訴訟記録の公表を支持したが，同じくイギリス式の陪審員制度には反対して，民衆によって選出された専門の法律家による裁判制度を提唱したことを指摘し，またグランジュ(II-6)は社会政策において対立するチュルゴとネッケルではあるが，賃金論をとおして両者の社会階級構成論をみると，2人はいずれも僧侶，貴族，第三階級という伝統的カテゴリーを捨てて，資本家と労働者という階級関係で分析しようとしており，ともに新時代の代表であるという共通性を持つという。これらはあまり論じられたことのない論点として興味深いが，行政といってもいわば現実との衝突のない理論あるいは提言にとどまっている。しかし他の報告はいずれも例外なしに，現実を前にした理論過剰の，あまりに観念的な行政官チュルゴの限界を鋭く指摘している。モランジュ(II-1)はチュルゴが絶対君主政の支持者で，同時に「人民主権の不可侵性」の信奉者でもあった矛盾を指摘している。チュルゴはこの矛盾の解決のためには，ただ国民教育という啓蒙の手段に訴えるほかはなかったのであり，そのめざす啓蒙的国家は非植民地主義と政教分離の国家であったが，自由の直接的結果として不平等主義を是認する国家でなければならなかった。この不平等主義は無限定の所有権を承認することになり，チュルゴはこのことに批判的であったが，政務に妨げられて，この点の理論的考察は示されなかったというのである。しかし政務に妨げられなくても，この点の理論化は大いに困難であったのではなかろうか。

アゴスチニ(II-2)はチュルゴが労働の権利を所有権の最も神聖な権利として賦役を廃止したことの意義はともかく，彼の自由の原理が社会の歴史にではなく，観念としての自然に根ざすものであったために，ギルドの解散令は逆に労働の団結権を否定して，ル・シャプリエ法の先駆となり，経済的独占をほしいままに許した19世紀の粗野な資本主義に道を拓いたという意味で，チュルゴの限界を指摘する。行政官チュルゴの限界はいたるところで指摘される。カトゥリノ(II-5)はチュルゴが財政的正義にかんしては意欲的な改革論者でありながら，正統的な重農主義思想に制約されて実践的には控え目な改革者にとどまったという。またテグジエ(II-8)は地方長官時代のチュルゴが管轄地区であるリムザン地方の歴史調査に積極的な協力の姿勢を示さなかった事実をとりあげて，彼が普遍史には熱中するが，現実のフランスの一地方史にはなんの関心も示さない，その観念性を批判している。

アルエル(II-12)はチュルゴが当時の他の地方長官のように，リモージュの都市近代化に十分とり組めなかったのは貧しいリモージュの財政に制約されたためであり，都市計画にさきだってなすべき事業，すなわち1770年の食糧危機対策があったのだと同情的であるが，ペロネ(II-9)はチュルゴが，その1770年の危機に際会しても，重農主義の原理に忠実に従って穀物の高価と完全な自由通商を望むばかりで，地方当局の行政的介入をいっさい拒否した経過を述べ，あまりに貧しいリムザンは農業資本主義をめざすチュルゴにとっては一箇の実験場ですらなく，すでにそこに発見できたはずの「小麦粉戦争」の失敗の原型をみることさえできなかったと結論している。キュベルタフォン(II-11)によれば，チュルゴには固有の農業政策はなく，あるのはただ執念として論理的極限にまで押し進められた自由の思想だけであった。キーナー(II-10)もまた，1770年のリムザンは本来ならばチュルゴにとって第1級の観察の場であるはずであったが，「体系の精神」のチュルゴにとっては「事実の体系化」は関心の対象ではなかった。チュルゴがケネーやミラボに与えた「彼らは事実にもとづく批判に強くない」という評言を彼自身に返すべきだと断じている。

これらの評価は一見チュルゴの行政に対する酷評とみえようが，それはこれまで伝統的にチュルゴを理想の政治家として扱ってきた伝説的な評価に対する批判である。この論文集でもエバンスタン(II-7)がコンドルセによるチュルゴ伝が家系の栄光や早熟の天才や普遍的精神を強調して，まるで神話的な聖者伝となっていることを徹底的に描きだしている。ではなぜ，このような伝記が成功したのか。革命で傷つき，民衆の反逆の恐怖につきまとわれた19世紀のブルジョワジーが，これを「デウス・エクス・マキナ(機械仕掛の急場の救い神)」として用いたのである，と報告者はいう。たしかにそうだといえよう。だがそれは行きすぎたひとつの反動的評価であるかもしれない。その意味では，フィリティス(II-3)は慎重な評価を持とうとしている。彼は『自治体論』の分析をとおしてチュルゴの改革のなかに観念性と急進性とが同居していることを指摘しつつも，それらの特徴はフランスの長い行政の伝統のなかに位置づけて理解すべきであり，それによってはじめてチュルゴの失敗の歴史を知るべきではないかと新たに問題を投げかけている。私もフィリティスの提言に同意したい。しかしフィリティスの用いた『自治体論』の資料の真実性にはすでに重大な疑

問があるといわざるをえない。既発表資料の再吟味，未発表資料の発掘，そしていわれる如く新版全集の完成が望まれるのである。 〔津田内匠〕

1) *Turgot, intendant du Limousin, 1761–1774.* Catalogue de l'exposition. [Limoge, 1961] 69 pp.

2) 津田「Hume と Turgot(2)」『経済研究』1983年4月(第34巻第2号)，参照。

3) M. Kiener et J. C. Peyronnet, *Quand Turgot régnait en Limousin, Un tremplin vers le pouvoir.* Paris, 1979, 333+ [ii] pp.

The Economic Studies Quarterly Vol. 37 No. 1 (発売中)
季刊理論経済学

《**Articles**》
Takashi Negishi: Marx and Böhm-Bawerk
Yukihiko Funaki and Mamoru Kaneko: Economies with Labor Indivisibilities
——Part I: Optimal Tax Schedules——
Koichi Mashiyama: The Relationship between Wholesale and Retail Prices and Speculation
——The Case of a Middleman Economy——
Dionysius Glycopantis: Some Demand Theory in Continuous Models
Shigeo Takeda: Joint Production and a Discontinuous Switch on the Wage-Profit Frontier
Kazuhiko Nishina: The Effect of Firm's Capital Structure on the Valuation in Financial Markets
《**Notes and Communications**》
Takao Fujimoto and Paola Indelli: A Note on Quick Stability Checks for Linear Difference Equations
《**Book Reviews**》
籔内繁巳著『産業連関と国際貿易』(小野 浩)
小宮隆太郎・奥野正寛・鈴村興太郎編『日本の産業政策』(篠原三代平)
瀬岡吉彦著『資本主義経済の理論』(中谷 武)
塩野谷祐一著『価値理念の構造』(井上達夫)

B5判・96頁・定価1300円 **理論・計量経済学会編集／東洋経済新報社発売**

農業経済研究 第57巻 第4号 (発売中)

《**論 文**》
飯沼二郎: 農業革命の一般理論
向井清史: 戦前沖縄における甘蔗・米新品種普及と農民層分解
松本武祝: 朝鮮における水利組合事業の展開
——「産米増殖計画」期を中心に——
澤田 学: 食料需要と価格・所得，世帯属性
——需要体系分析による接近——

《**書 評**》
堀口健治著『土地資本論』(宇佐美 繁)
アレクサンドル・チャヤーノフ著，和田春樹・和田あきこ訳『農民ユートピア国旅行記』(川口 諦)
安藝皎一著作選『川の昭和史』(永田惠十郎)
金沢夏樹編著『農業経営の複合化』(七戸長生)

B5判・54頁・定価1200円 **日本農業経済学会編集・発行／岩波書店発売**